発刊によせて

世の中で一番尊い仕事は教育であると思う。未来をつくるとか、文化を継承するとか、そういう機能的な意味からではない。教育とは命を与える仕事だからである。

何かを教えることは、自らの命を他人に与えるに等しい。自分が何十年も苦労して学び、身につけた成果を惜しみなく伝授する。これは自分の人生を他人に与えているのである。

フランスの哲学者デカルトは、『方法序説』の中で「ある種の精神の持ち主は、他人が二十年もかかって考えたことすべてを、二つ三つのことばを聞くだけで、一日でわかると思い込み、しかも頭が良く機敏であればあるほど誤りやすく、真理をとらえる力も劣り」云々と嘆いた。「我思う、故に我あり」とのデカルトの言葉には、彼の長年にわたる悪戦苦闘が刻まれている。それを一朝一夕に理解できるはずなどないと、デカルトは言う。しかし、それは頭で理解しようとする人に当てはまることだ。デカルトから学ぼうとする人は、彼の発見を信じ、素直に受け入れる。すると、デカルトの人生が学ぶ者に乗り移る。謙虚に学べば、デカルトの二十年の努力をもらえる。命をもらうのと同じである。教育には、そのような意義がある。

命を与える教育は、智慧を与える教育とも言い換えられよう。知識を与えて理性を発達させるのは、教育の最低義務にすぎない。理性を使いこなす智慧を与えてこそ、真に教育である。智慧は、我々の生活感覚を磨き抜いたものである。いわば人間としての力である。教育は、智慧の人間力を与える仕事である。そして、智慧の伝達には信頼関係が求められる。古来、その関係は師弟の形をとった。智慧を与える教育は、師弟関係を前提とする。

知識は、望遠鏡や顕微鏡のようなものである。それは肉眼では見えない世界を見せてくれる。しかし、必ずしも我々の生活感覚と合致しない。望遠鏡で遠くばかり見ていたり、顕微鏡で微細な存在ばかり見ていると、肉眼で現実を捉える感覚が薄らいてくる。あたかもそのように、知識偏重の教育は、遠くの理論で近くの現実を裁く人間を育て、社会に大きな歪みをもたらす。現実に即した智慧を与える教育が望まれるゆえんである。

智慧を与えることによって、教育は人類の運命をも動かすだろう。経済学や社会学などの学問は、人類の諸問題を解決するためにある。これに対し、智慧の教育はそれらを予防するためにある。問題の予防は、問題自体をなくすことだ。災難を未然に防ぐ。これは運命を変えるのと同じである。ここに及んで、教育は宗教的になる。智慧の教育は、人間の可能性を信じる宗教である。

「知識人は問題を解決し、天才は問題を未然に防ぐ」と、物理学者のアインシュタインは言った。この天才とは、智慧の人に他ならない。知識人の仕事が社会の病の治療に譬えられるとすれば、教育者の仕事は社会の健康の維持である。病気を治すよりも、病気にならないほうが素晴らしい。優れた知識人は秀才だが、真の教育者は天才である。後者は社会に智慧を与え、問題を未然に防ぐ力となり、社会の運命を変えていく。

我が昌平黌は今、人間力の教育を掲げ、智慧と勇気を兼ね備えた人材を世に送り出さんとしている。命を与える、智慧を与える、という教育本来の仕事に邁進している。伝教大師最澄の有名な言葉に「一隅を照らす。これすなわち国宝なり」がある。地域の一隅を照らしつつ、国を救い、世界を救う国宝を育てる。昌平黌の一翼を担う当研究所も、その使命を自覚し、知識の探求がそのまま智慧の啓発につながるように、研究・教育の両面で貢献したいと願っている。

平成二十九年二月

東日本国際大学
東洋思想研究所所長
松　岡　幹　夫